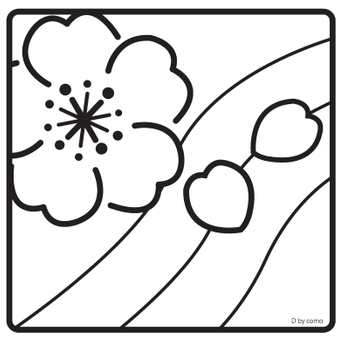
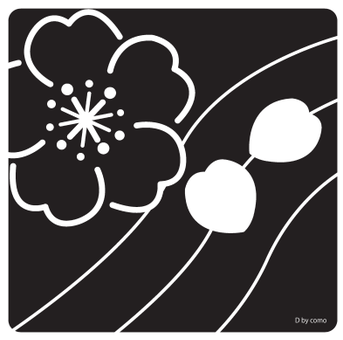
ロスプリベンションへの道4 協働防犯

監査やセキュリティ担当者向け応援歌～夫婦桜窪監査室長事件簿～

その二 (24)





第二章

歩きだした。目黒川に架かる橋から、川端に等間隔で立っている冬枯れの桜並木が見えた。正午過ぎの日差しが心地よい。冬鳥達も桜の小枝で羽を休めていた。

―花が散ってしまった桜など誰も見向きもしないものだ。

ましてや葉桜など、毛虫が頭に落ちてくるし、ろくなもんじゃない

それなのに、なぜ、人はこの木を植えるのか―

確かに満開の桜はみごとだが、なぜか自分は桜が好きになれない。そう思いながら窪は漆黒の静かな水面に目をやった。橋を行きかう師走の雑踏、自動車の往来とは反対に、目黒川に浮かんだ桜の枯葉がゆったりと流れていく。それは青葉の成れの果てに違いない…

ひょっとしたら、今の自分はあの枯葉かもしれない。ただ惰性で流されている人生のような気がした。

「窪さん！」

「窪さんですよね」

振り返ると笑顔の少女がいた。

「津田です。津田靖子です。研修会でお世話になった」

研修会という言葉で窪は思い出した。

「大リーダー？」

「そう、津田です」

三年前に入社した津田靖子だった。

靖子は十八で入社したのだから、今年で二十一歳になる。だが、その顔にはあどけなさが残っていた。笑うとできる笑くぼのせいだろう。

「研修会のときは怖かったですよ、窪さん。窪さんの前に行くだけで叱られるじゃないかとビクビクしていました」

「津田さんは、大リーダーとして、皆をしっかりまとめていたじゃないか」

「でも、あの厳しい研修会が無事終わって、配属辞令をいただいたとき、目頭が熱くなりました。これで社会人になったんだという気がしました」

「ほっとしただろう。私のときの新人研修会も先輩トレーナーが怖くてね。二度とこんな研修は受けたくないと思ったよ」と窪は笑いながら歩き出した。

靖子も笑いながら後に続いた。そして、店舗に行く理由が現金不足の件なのか、窪に尋ねてきた。窪はその質問をはぐらかした。

監査前に不用意なことを言って調査をしくじってはいけないのだ。そして、その理由以上に、なによりも調査前の今は、この陽だまりを楽しみたいと思った。

「今日は、午前半休だったの」

「そうです。母の検診に付き添って病院に行っていました」

「ご病気なの」

「ええ…」今度は靖子が答えなかった。

少し間があって「すい臓癌が再発して、手術に向けての精密検査を受けてきたところです」

「お母さんはおいくつですか」

「四十五歳です」

窪は、津田の履歴書を思い出した。この家庭は、靖子と母だけの二人だけの家庭だった。面接時にチェックしたので憶えていた。母子家庭だからと差別はしないが、配属などの件で配慮しなければいけない点があるからだ。

「そうか…」相手にかける適切な言葉が出なくて困った。そして、靖子の黒髪をちらっと見ながら元気付ける言葉を探した。

靖子は少し大きな声で

「本気、本気でやれば たいていのことは出来る！ 本気、本気でやれば何でも面白い！ 本気、本気でやれば誰かが助けてくれる！ 人間を幸せにするために、本気で働いている人は皆美しい！ この檄文を窪さんは私たちに何回も言いましたよね。だから、自然と暗記しました。苦しいときの私の応援歌です」

「そういえば、最近やっていないな。後藤静香先生が作られた本気の唱和」

窪は今年の八月二十一日に監査室長に配置転換になってから、研修時の本気の唱和だけでなく、人事部制作の教育テキストに目を通すこともなかった。つまり、人を育てる仕事から、人のあらを捜す仕事に変わったのだ。

「どうしたんですか、さきほどとても暗い顔されていましたよ。橋の上から何を見てらっしゃったのですか」

「枯葉が流れていくのを見ていたのさ」

「枯葉を…」

「二枚の枯葉が流れていて、どちらが早く進むのかを見ていたのさ」

窪は嘘をついた。流されている枯葉が、自分のように思えたとは言えなかった。いや、言いたくはなかった。

「どうして、そんなに暗い顔をされているのか私には分かりませんが、本気でいきましょうよ。いいですか、本気！」と靖子が本気を口にした。窪もその跡に続いた。

「本気でやれば、大抵のことはできる！ 本気！ 本気でやれば何でも面白い」

【本気の檄文】を唱和しながら、靖子や店舗スタッフのためにも、この問題(現金不足)を解決しなければいけないのだ。

靖子に元気付けられて窪は店舗入りした。

ちょうどその頃、本社の会議室では、三人の男達がひそひそ声で打ち合わせをしていた。

一番の男「そんなことまでしろとは頼んではいないぞ」

二番の男「でも、あの時間ではその方法しかなかったのです。是が非でも達成しろという命令だったので。ただちょっとした手違いで大きな話になってしまい、申し訳なかったと思っています」

三番の男「いまは我々よりも森永が率いる企画畑の連中のほうが役員会で優位に立っています。今回の制度変更で全人件費を5%削減したことも、結局は彼らの成果になったから不思議です」

一番の男「担当のお前がしっかりしないからだろう。従来は店長以上の管理職手当を二年目の社員から支給して、そのかわりに残業費をカットさせた。せっかく営業社員に泣いてもらったのに、喜ぶのは、森永の後ろ立てになっているコンサルタント会社と銀行出身の役員だけだろう。いいか、もともと裏日本の漁村にあった衣料品屋をここまでのし上げたのは、叩き上げの我々ではないか。つまらないミスで墓穴を掘らないようにしないとな」

二番の男「あの店のスタッフにはしっかり念押ししておきました。窪に気づかれることはないでしょう」

一番の男「窪は今までなんとか高いハードルをクリアーしてきた。社長は窪のことを使える男だと言っているよ。もっとも腹の底では信用していないと思う。ああいうタイプを何人も使い捨てにしてきたからな」

三番の男「確かに」

一番の男「窪のように人に弱みを見せるヤツほど、人を引きつける魅力がある。そして最後にはバカ力を発揮して逆転優勝する。まあ、それも組織で制御できる間だけ重宝がられる。うふふ」

五反田店の店舗スタイルはロードサイド店型というよりは都心店型に近かった。なぜなら平日の売上が土日の売上を上回っていたからだ。仕事帰りのホワイトカラーに支えられている店だった。

小さなストックルームの片隅で監査員の竹島と加々美がPOSの販売記録をチェックしていた。

「けっこうこの部屋は寒いですね」といいながら窪が入ってきた。

「今日はまだいいんです。昨日が寒かったのなんの、ホッカイロを五個も身体に入れてやっていました」と監査契約社員の加々美が言った。六十一歳になる加々美には寒さが堪えるだろう、右手には指先の切り落とした軍手、親指と人差し指には青の指サックがはめられていた。

「この店の休憩室と事務所は狭すぎです」

三十歳、経理出身の竹島が愚痴をこぼした。本来なら事務所でやればいいのだが、六畳ほどの事務所兼休憩室にはロッカーも置かれており、そこでの作業は無理だった。ビジネス鞄から出した缶コーヒーはまだ熱かった。五反田駅のキヨスクで購入した缶コーヒーを二人に渡し、そして、一本は自分で口をつけた。

「すいません」と会釈して、二人も礼をして飲み始めた。

竹島が今までの調査内容を語った。

「伝票関係やジャーナルも調べましたが気になる部分はありませんでした。前日にいた副店長の榎戸さんやレジ閉めを担当した女性社員の津田さん、そして、翌日の開店処理をした社員候補の斉藤さんと面接して、監査ポイントを確認しましたが、これといって気になる点はありませんでした。笹瀬店長は、十万円の不足が出る二日前から、実母の葬儀のため、九州に帰っているので今回の件とは関係ありません。機械警備記録やFAXの送受信記録、電話の記録も確認しました。念のため、昨日と本日出勤しているパートさん達にも最近何か変わったことがないか、確認していますが、何かを隠している様子はありませんでした。この後、ご近所の挨拶回りをして店舗の印象をヒアリングします」

竹島は決められたことはきっちりこなした。そして、伝票やPOSジャーナルは確かめ算をして監査ミスを防ぐことに務めた。愛想が無いのが欠点だが、監査員としては、その方がいい場合もある。

続いて加々美が「一年前のこの時期も、現金不足の件で調査に入りましたが、あの時は結局迷宮入りしました。あれから店舗の社員は全員が異動になったので同じ犯人の可能性はありません。ただちょっと気になることがあるんです。なにかしっくり来ないんです。第六感というやつでしょうか、この店はどの店舗よりもしっかりとした運営がされています。完璧なくらいです。しかし、何かが違うんです」

加々美の第六感はよく当たった。加々美は業務監査経験が三〇年を超えている。前職の家電チェーンは定年前に倒産した。ご縁あってこの会社の契約社員として働いている。この男の人を見る目は確かだった。

さて、この後の調査をどう進めたらよいか。それを考えるために、まずは見落としがないかポイントを再確認しはじめた。

まず事務室の伝票ファイリングを診た。日付順に保管されていた伝票と出力ファイルはミスなく照合され、責任者のデータ印が押されていた。事務室の掲示板には今週の通達や連絡表が貼られており、店舗全員の確認サインがされていた。売場の商品整理もスーツの肩線も合っており、日ごろの努力の継続が形になっていた。切れた照明は一つも見当たらなかった。完璧な管理だった。

POSレジの前に立ち、窪はあたりを見渡した。引き出しの中に答えが残っていないか。レジのドロアーを出して奥にお金が落ちていないかチェックしようとした。奥は暗くてなにも見えない。窪は榎戸に懐中電灯を持ってくるように依頼した。

「いいですよ。でも、僕もかなり捜したんですよ」と小柄な榎戸は怪訝な顔をした。

「上の方に詰まっていないかと思ってね」と窪が答えたとき、榎戸はそこにはいなかった。榎戸は高校卒業と同時に入社して、今年で三年目だった。四ヶ月前に副店長に昇格したばかりだ。特にイメージに残るタイプではなかった。事実、今朝、履歴書を見るまで彼の出身地を忘れていた。しかし、自主参加の研修会でよく見る顔だった。

三年目か、津田と同期なのか、しかし、それ以上考えるゆとりが窪にはなかった。かれの心は目の前のレジの闇を見つめていた。

戻ってきた榎戸から渡された懐中電灯で内部を見たあと、カウンターの中はレターケースや伝票入れの中まですべて見た。出てきたのは、クリップ二個と輪ゴムだけだった。もう何人も捜しているのだから見つかるはずなどないのだ。しかし、窪は諦めなかった。POSレジの下が気になったので、榎戸に持ち上げてもらった。

「重いか？」

「大丈夫です」

POSレジの下には、メモ用紙が数枚あった。用紙は電話のメモだった。現金がここには無いだろうと思ったが、やっぱり無かった…

「何かありましたか」

榎戸の質問に、んーと言いながら窪は見続けた。

側面の下に黒い部分があった。よく見ると7ミリほどの隙間があった。隙間は下に続いていたが、懐中電灯の光は下には届かない。

「ここに隙間があるけど、中はどうなっているんだ」

「そんなところに隙間ですか… 初めて知りました」

「気にならないか」

窪はその隙間を丹念に調べたが、隙間の幅が狭く、中の袋小路になっている奥まで探すのは無理だった。

「切るしかないか…」とつぶやいた。

榎戸は、その様子を離れた什器の影から見つめていた。

窪は迷い、受話器の向うの中田につぶやいた。

「三十万円もするんですか…」窪は迷った。さすが営業管理部の次長の中田はその方面の話には詳しかった。あるかどうか分からない十万円のために、三十万円のカウンター什器を真っ二つにぶった切る意味があるのか。経済的な合理性から考えるとナンセンスな話だった。窪は中田に聞いた。

「先輩だったらどうしますか」

「俺なら切るだろうな」

しばらく間があって

「ただお前には勧めないよ。恐らく見つからないし、そうなれば、責められるのはお前だからな」

そう言って中田は電話を切った。

その後、窪は社員候補の斉藤と面談したが、不審な点は無かった。斉藤は先月までガソリンスタンドの店長をやっていた。近隣にセルフ販売のスタンドができたため店は閉店に追い込まれた。別のガソリンスタンド店へ異動は可能だったが、通勤に二時間近くかかるので思い切って辞めた。三十五歳で娘が三人いる。声が大きく、明るい人だ。

目黒川を見つめて（生成 AI が作成したイメージ）

続けて斉藤は

「何回も数えたんです。だって十万円も不足していたんですから。自分、入社してまだ一週間です。みんな自分のことを疑うんじゃないかって。だから必死に探していました。レジの開店準備のやり方もまだ教わっていなかったので本当に不安でした。だから、情報システム部に連絡して、操作ミスをしていないか確認しました。でも、お金が足りない理由はわかりませんでした」

斉藤は潔白だった。しかし、窪は確認のためにただ…」

斉藤は、あの日、津田靖子の出勤が遅れた理由を話した。理由は母親の病気のためであった。しかし、斉藤は詳しいことは知らないらしい。

「ところで、仕事はだいぶ慣れましたか」と人事にいたころの癖で窪はそんなことを口にした。斉藤は少し、ほっとした顔で

「スタンドの仕事と違って、対面販売は難しいですね。お客さんの気持ちになって提案しないと売れないですね。それと二ヶ月先に本社で行われる社員登用試験のことが不安です。難しいと聞いていますから」

「ええ難しいですよ。でも本気でチャレンジすればなんとかなります」

斉藤は、また不安そうな顔をした。しばらく窪は斉藤の目を見続けた。

不正調査の面接は、なにげない一般的な会話と不正調査のときに見せる表情の違いを読み取ることが必要である。不正は平静を装うが目が泳いでいることが多い。無の者は、感情をあらわして強く抗議をすることが多い。心の動きや感の変動を読み取り、小しに手持ち情報を出しながら、少しずつ相手を追い込んでいく。

人事時代、研修会で、研修の終了に店舗で起こった不正を話す者がいた。

告発者は信に満ちた義感で話すけではなかった。思い余って苦しみながらぼそぼそと始める。

「店長はいい人です。よく食事もご走してくれるんです…」

告発者の目が赤くなっている。そのような場合はならず不正関することった。このようなケース場合、不正そのまま放しておくとその社員はずれ辞めてく。

店舗から出された退報告書のに、理由がっきりしなる。電話で認して、〝かしい〟とじた場合、の本人に直面接すると正絡みの場があった。人事時代、が社員を救うためにやたことが会社から評価れ、監査室に回された不正を見つけるためにったことではなかったで、不本意だった。

しかし、社長命令なで断れなかった。

監査室の三人、窪と島と加々美は勤務チャトを見ながら、面接の認漏れがないか話しあった。だが全員との面談で尋ねるべきことはすべて終わっていた。

竹島は「前日、金庫にお金をしまったのは津田です。状況から見て怪しいのは彼女だと思うのですが」

加々美は「店舗を最後に出たのは副店長の榎戸なので、金庫を開けることは可能だったと思います」

窪は「もし、盗んだとしたらその二人のどちらかだろう。ただ、レジ横のカウンターの隙間が気になる」

竹島は「それはありえないでしょう。レジを精算したときにはちゃんと現金照合されていたんですよ」

窪は「その後に、隙間に落ちたということは考えられないだろうか」

竹島は「絶対無いとはいえませんが」薄笑いを浮かべた。無いとは言わなかったが本気にはしていないようだった。

加々美は「一年前の調査ではそこまでは調べなかったので、調べたい気もしますが…」たぶんダメだろうという言葉を吐きかけた加々美は、その言葉を口にはしなかった。

窪は「少し考えさせてくれないか」と二人に言い残し、津田の姿を探していた。津田の意見を聞いてみようと思った。参考にしたいわけではないが、彼女の意見を聞くという手続きが必要だと感じた。

津田は大袋三つ分も購入してくれた年配の女性顧客を車までお見送りしていた。後部座席に荷物を載せながら、

「もし、サイズが合わなかった交換させていただきますね」

それに応えるように婦人は

「ほんとうは主人自身が来ればいいんだけど、膝が悪くなってからはすっかりで出不精になってね」

窪は少し離れながら二人の会話を聞いていた。最初から津田は犯人だとは思っていなかったが、このとき津田は白だと確認した。だが、これだけ平然としていられるのは反対に何かを知っているのではないかとあらたな疑惑が沸いた。

かすかな話し声が聞こえた。窪は店舗駐車場の奥に目をやった。

そこにある桜の老木の下で落ち葉を集めている人たちがいた。

大型店舗でもないのに掃除を委託しているのか。

ひょっとしたら、何かを知っているのではないか…

「精がでますね。お疲れさまです」と声をかけてみた。

年配の男性が振り返り、にこやかに笑った。

男性「桜の落ち葉もピークを過ぎ、片付けがだいぶ楽になりました」

窪「いつも片付けをされているんですか」

男性「だいたいは」

窪「ご苦労様です。大変ですよね」

竹ぼうきの手を止め、年配の婦人が話しはじめた。

「大変なもんですか。楽しいですよ。毎日この木の下に来ることが」

この人たちは誰なのか？

女性は話を続けた。

「大方の人は葉桜になればこの木のことを忘れてしまいます。でも新緑の青葉は人をすがすがしくしてくれます。梅雨の時期は幹の回りで旅人が雨宿りをしています。夏休みが始まるころ、子供たちは、ウキウキ気分でミンミン蝉を虫網で追っかけます。そして、夏休みが終わる頃、ヒグラシの落ち着いた鳴き声が夏の終わりを告げます。運動会の頃は、まだ日中の日差しが強いので、応援合戦が始まる前のお昼ご飯は木陰に敷いたシートに集まります。皆さん、おいなりさんを口いっぱいに頬ばりませんでしたか。うふふ。今年は急に冷え込んだから、葉っぱがいっせいに色づきました。ほら都会でもこんなに鮮やかな紅葉が楽しめます。そうでしょう。そして、冬にこそ一番の大切な役目があります。落ち葉は大地の栄養になりあらたな命を育むゆりかごになります。枝は冬鳥たちの休憩所になります。樹はみずから裸になり、わずかな陽の光を大地と人に分け与えてくれます」

窪はその話に聞き入った。

気づくと津田靖子が隣にいた。

「窪さん、こちらはこのオーナーの小泉さんです」

「え？」

「この桜の木は、小泉ご夫妻の記念樹なのです」

「そうだったんですか…」窪はやっと状況がのみ込めた。そして、夫妻に自己紹介をした。但し、監査で来たことは言わなかった。

「記念樹の説明をしたら、お宅の佐伯社長さんが桜の木を残すことを約束してくれたんです。人情味のある社長さんですよね」

とご主人が話してくれた。社長に人情味？ そんなわけが…

「小泉さんには、駐車場掃除は店の者がやりますからとお話しても、こうして毎日来ぐださるんですよ」

婦人が

「靖子さん、いいんですよ。いいんですよ。好きでやっていることなんですからね」

「ありがとうございます」

靖子は一礼した。つられて窪も頭を下げた。

「この店の従業員さんは、皆さんきちっとしている。物腰も丁寧なので知り合いに店の紹介をしても安心ですよ。とくに靖子さんはわたしたちが作業をしていると温かい昆布茶を入れてくださるんですよ。気立てのいい人だから早く嫁に行ってしまうんじゃないかって主人が淋しそう言うんですよ」

「確かにそうかもしれませんね」と窪が続けた。

「そんな人はいませんよ」と靖子は下を向いてはにかんだ。

靖子の表情がおさな子のようで、夫妻と窪はほほえましく思った。

枝に残された一葉よりも靖子の顔のほうが赤く染まっていたからだ。

その後、窪はレジカウンターを切って確認することを靖子に話した。靖子はただ「そうですか」と言っただけだ。

いつもの靖子とは違っていたが、今問い詰めても何も語ってくれることは無いだろう、靖子の目を見てわずかにうなずいた。そのとき、窪はカウンターを切ることを決めた。不明金を見つけるためでなく、人の良心を探し出すために。